

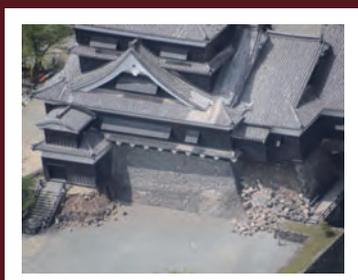


活断層

の地震に備える

—陸域の浅い地震—

東北地方版



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



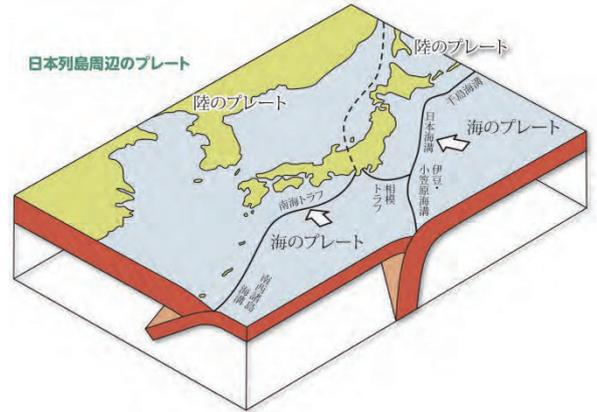
気象庁

Japan Meteorological Agency

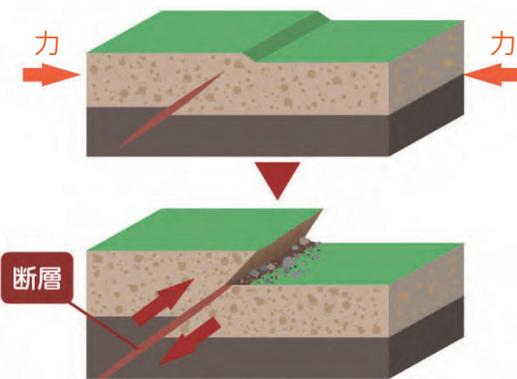
陸域の浅い地震と活断層

地球の表面は十数枚の巨大な板状の岩盤（プレート）で覆われており、それぞれが別々の方向に年間数 cm の速度で移動しています（プレート運動）。

日本列島周辺では、複数のプレートがぶつかりあっており、岩盤の中に大きなひずみが蓄えられています。そのため、海のプレート境界やプレート内のほか、陸域の浅い所（深さ約 20km より浅い所）でも多くの地震が発生します。これを「陸域の浅い地震」と呼びます。

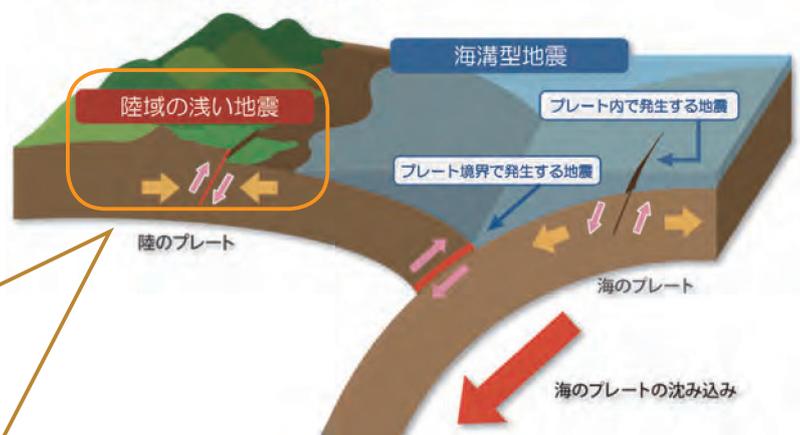


陸域の浅い地震の発生のしくみ



長い年月をかけて地下の岩盤に力がかかり、それが限界に達したとき、岩盤が「断層」を境に急速に動きます。こうして地震が発生します。

日本列島周辺で発生する地震のタイプ

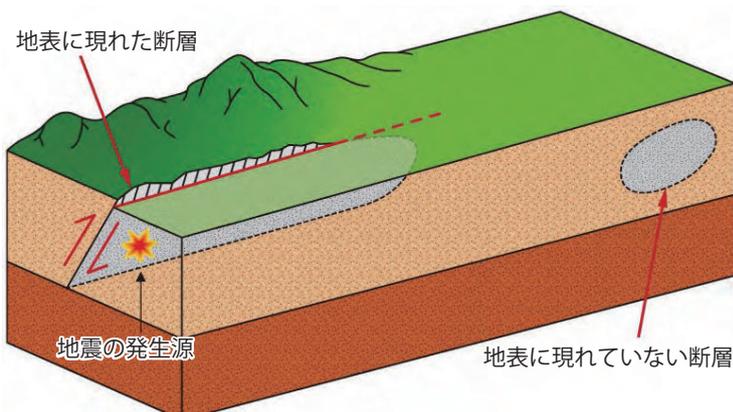


過去に繰り返し地震を起こし、将来も地震を起こすと考えられている断層を「活断層」と言います。

日本の周辺には約 2,000 もの活断層があり、それ以外にもまだ見つからない活断層が多数あると言われています。

死者・行方不明者 6,437 人などの被害が生じた平成 7 年（1995 年）兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）や、死者 271 人などの被害が生じた平成 28 年（2016 年）熊本地震も、活断層の動きによって発生した地震です。

活断層がない場所では、地震は起きない？



活断層では、地震の規模がある程度大きくなければ、地表に断層のずれが現れません。また、断層のずれが地表に現れていた場合でも、その後の浸食や土壌の堆積により痕跡が不明瞭になり、見つからない活断層もあるかもしれません。

したがって、活断層が確認されていない場所でも、被害をもたらすような地震は起きることがあります。

明治24年(1891年)の濃尾地震

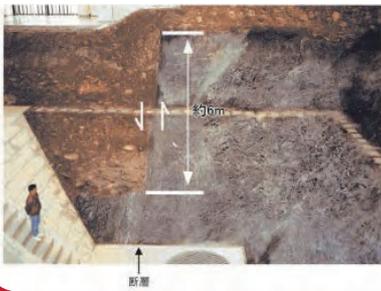
《活断層で発生した日本最大級の地震》

岐阜県から福井県にまたがる濃尾断層帯で発生した地震で、明治時代以降、日本の陸域の浅い地震としては最大のマグニチュード8.0を観測し、死者7,273人などの甚大な被害が生じました。濃尾断層帯のうち、本巣市根尾水鳥周辺の根尾谷断層では、地表に

6メートルもの段差が生じ、その痕跡は国の特別天然記念物に指定されています。



断層のずれにより、写真中央の道路が寸断している(当時撮影)(本巣市)
写真撮影:小藤文次郎氏



根尾谷断層の様子が見られる(本巣市 地震断層観察館体験館)
写真提供:本巣市教育委員会

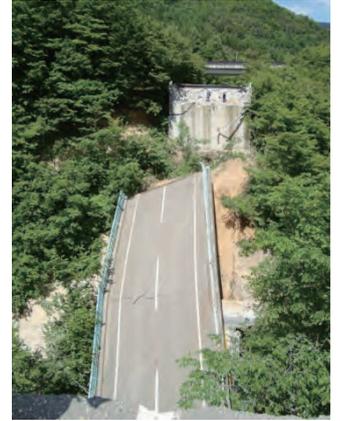
平成20年(2008年)

岩手・宮城内陸地震

《世界最大の加速度を観測した地震》

死者・行方不明者23人などの被害が生じました。また、大規模な土砂災害が発生し、国道に架かる橋が落ちるなどしました。

この地震では、非常に激しい揺れを観測し、活断層のごく近くにある地震計で、地震の記録としては世界最大となる4,022ガルもの加速度が観測されました。



写真提供:岩手県南広域振興局一関総合支局

平成7年(1995年)兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)

《大都市の直下にある活断層で発生した地震》

死者・行方不明者6,437人などの被害が生じました。これは、過去100年間の地震災害としては、1923年の関東地震(関東大震災)、2011年の東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)に次ぐ人的被害です。気象庁などの調査では、「震災の帯」と呼ばれる著しい被害の生じた地域が確認され、1949年に新たに震度階級を加えて以来、初めて震度7と認定されました。

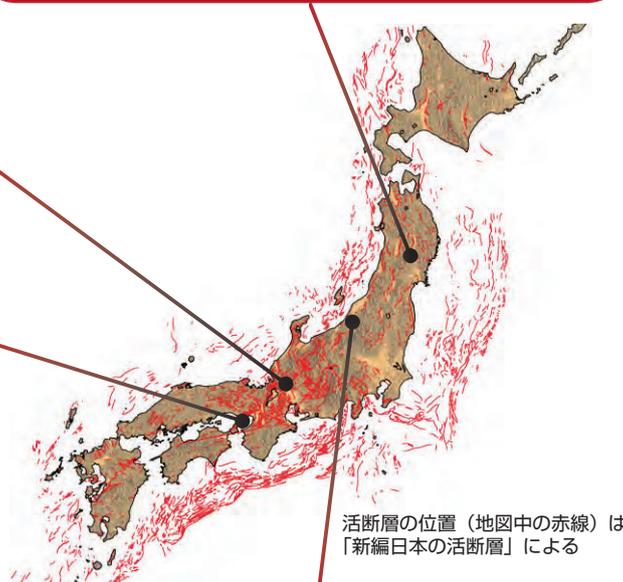
高速道路の倒壊や大規模な火災が発生するなど、大都市の直下で発生する地震の恐ろしさを認識させられました。



写真提供:防災科学技術研究所 井口隆氏



写真提供:阿部勝征氏



活断層の位置(地図中の赤線)は「新編日本の活断層」による

平成16年(2004年)新潟県中越地震

《山間部で発生した地震》

死者68人などの被害が生じました。土砂崩れにより河川のせき止めや道路の寸断が発生し、その結果、集落が孤立するなど、山間部の被害が顕著でした。

また、震度6弱以上を観測する余震が4回も発生するなど余震活動が活発で、余震による被害も発生しました。



写真提供:国土交通省北陸地方整備局湯沢砂防事務所

活断層による地震の長期的な発生予測（長期評価）

政府の地震調査研究推進本部（地震本部）では、平成7年（1995年）兵庫県南部地震や平成28年（2016年）熊本地震のような規模の大きい地震が発生する可能性のある全国約100の主要な活断層について、事前にその場所を特定して過去の活動履歴を調べることで、将来発生する地震の長期的な発生の予測（長期評価）を行っています。

東北地方の活断層については6ページをご覧ください。

2018年2月9日現在

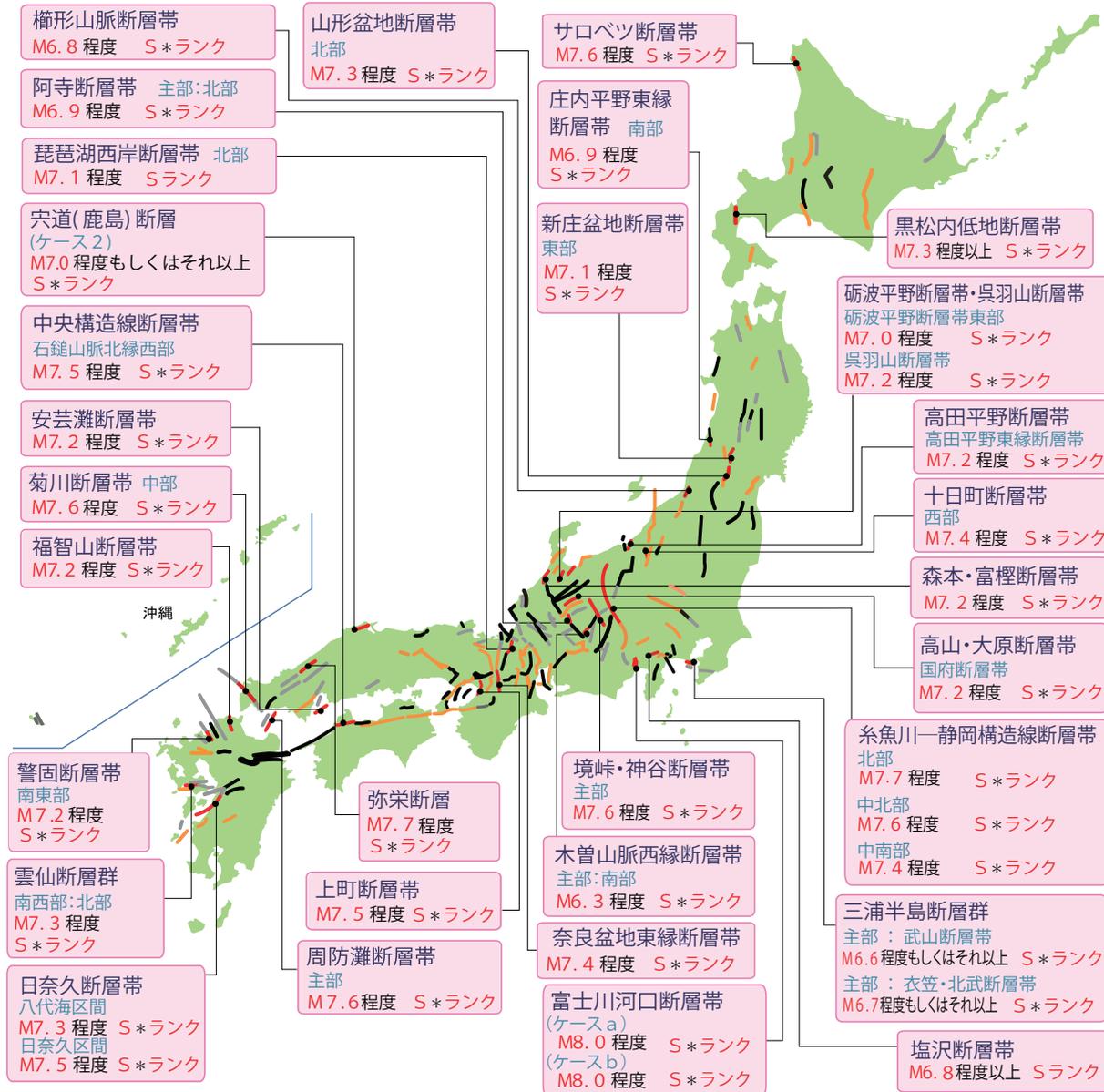
凡例：

- Sランク(高い)：30年以内の地震発生確率が3%以上
- Aランク(やや高い)：30年以内の地震発生確率が0.1~3%
- Zランク：30年以内の地震発生確率が0.1%未満
- Xランク：地震発生確率が不明（過去の地震のデータが少ないため、確率の評価が困難）

(注) 地震後経過率が0.7以上である活断層については、ランクに*を付記する。
*Sランク、Aランク、Zランク、Xランクのいずれも、すぐに地震が起こることが否定できない。

断層帯の名称
ランク
地震規模(マグニチュード)

ランクは2018年1月1日起点



○ランク分けに関わらず、日本ではどの場所においても、地震による強い揺れに見舞われるおそれがあります。

- 活断層の長期評価では、活断層の位置や、その活断層が活動した際に発生する最大級の地震の規模、その地震が今後30年以内に発生する確率(ランク)を示しています。
- 30年以内に発生する確率が不明(Xランク)の活断層は、地震発生確率が低いことを表しているわけではありません。
- 30年以内に発生する確率が小さいからと言って、地震が起こらないと考えるのは誤りです。また、確率が高いものが先に起こると考えるのも誤りです。

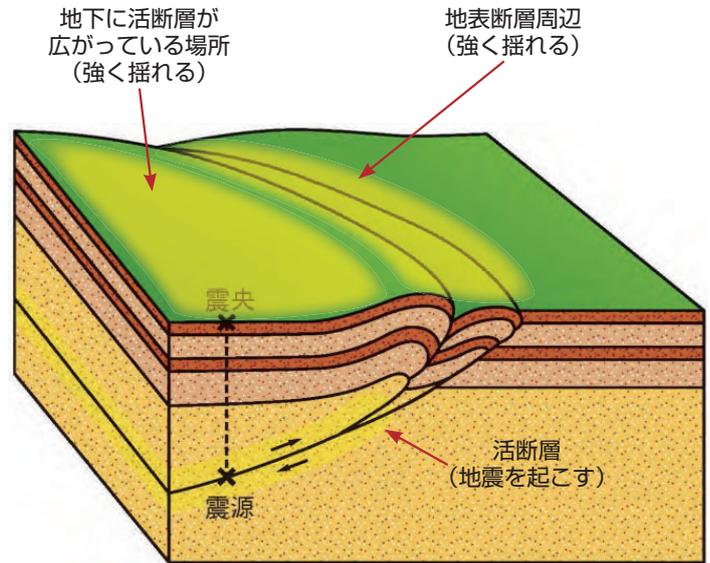
活断層の地震による揺れの予測（強震動評価）

活断層が地震を起こした時は、その周辺で命にかかわるような強い揺れになることが予想されます。

地震による強い揺れは、①「活断層の地下での広がり」と②「直下やその周辺の地盤」に大きく影響されます。

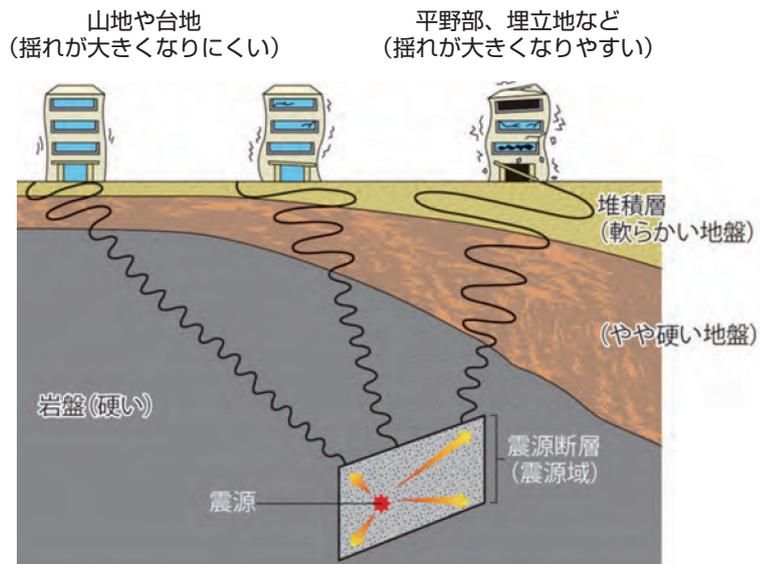
① 活断層の地下での広がりによる影響

活断層は、地下に斜めに広がっていることがあります。地表で見えている活断層から離れていても、地下に活断層が広がっていれば、強く揺れる場合があります。



② 直下やその周辺の地盤の違いによる影響

地震による揺れの大きさは、地盤によって大きく増幅される場合があります。一般に海や川沿いの平野部、埋立地などでは揺れが大きくなります。



地震本部では、活断層の長期評価の情報（活断層の場所、地震の規模など）に①②の影響を加えて、個々の活断層で将来発生が想定される地震による強い揺れの予測（強震動評価）を行っています。

東北地方の地盤や強い揺れの予測については、8～9ページをご覧ください。

POINT!

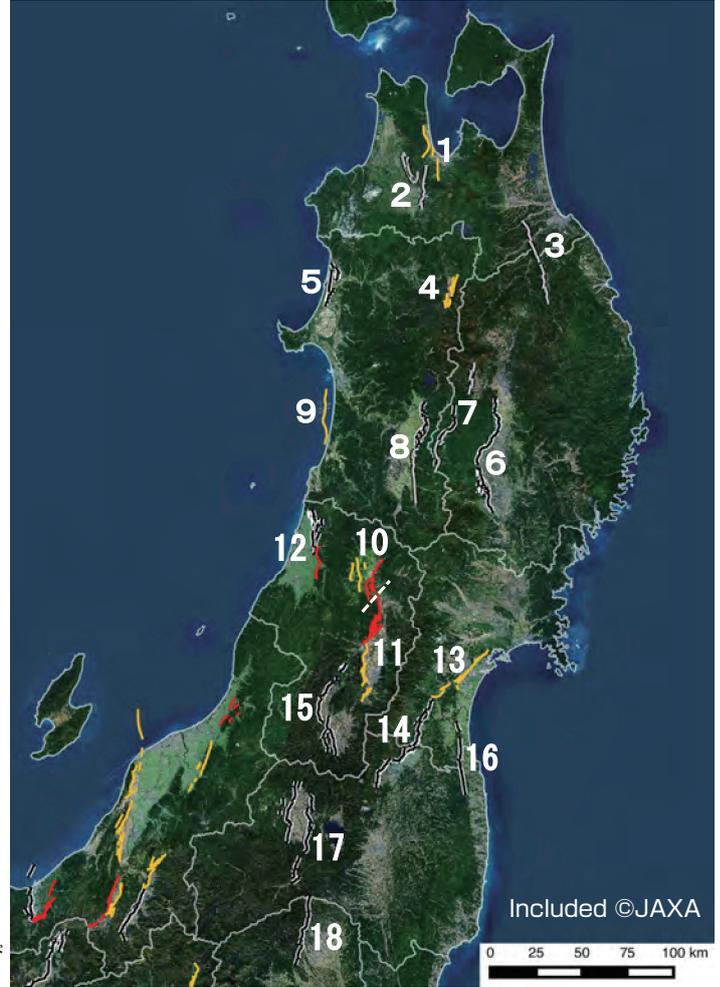
長期評価が行われている活断層が近くにある場合は、**その場所で過去に何度も激しい揺れに見舞われていることがほぼ確実**と言えます。その他の長期評価を行っていない中小規模の断層で発生する地震でも、大きな被害が生じる可能性があります。

したがって、日本に住む以上、どこにいても陸域の浅い地震に対する備えが重要です。

東北地方の活断層を持つ特徴

東北地方の主な活断層は、奥羽山脈などの山地と盆地・平野との境目や、日本海沿岸に沿ってほぼ南北方向に延びるように分布しています。その中には、今後強い揺れをもたらす確率が高い（Sランク）と評価されている活断層として、新庄盆地断層帯や山形盆地断層帯、庄内平野東縁断層帯があります。

この他の活断層や周辺の関東・中部地方や北海道地方の活断層で地震が発生した場合であっても、東北地方で強い揺れに見舞われる可能性もあります。



※図中の線は活断層を表しており、線の色及び数字は7ページの表を参照してください。

コラム 活断層ってどうやって調べるの？

活断層を調べる際は、まず、航空写真を使って、活断層が疑われる地形を見つけます。その後、現地踏査やボーリング調査（穴を掘って地層などを調べること）などにより、周辺の地質を明らかにします。また、地震波が地層や断層で反射・屈折する性質などを利用した調査が行われることもあります。断層の位置が十分絞り込まれたら、断層をまたぐトレンチ（溝）を掘って、断層を直接確認することも行われます。他にも、古文書などから過去の地震を調べる場合もあります。



人工的に地面を揺らして、地下の構造を調査（山形県） 写真提供：山形県



福島盆地西縁断層帯のトレンチ調査
断層面が直接確認された（福島市大笹生）
写真提供：福島県



横手盆地東縁断層帯のボーリング調査（秋田県）
写真提供：秋田県

活動した際に、東北地方に強い揺れをもたらすと考えられる主な活断層

	活断層の名称 (活動区間)	予想される地震の規模 (マグニチュード・M)	地震発生可能性 (ランク)	備 考
1	青森湾西岸断層帯	M7.3 程度	Aランク	
2	津軽山地西縁断層帯 (北部)	M6.8 ~ 7.3 程度	Xランク	1766年にM7.3程度の地震を起こした可能性がある。
	津軽山地西縁断層帯 (南部)	M7.1 ~ 7.3 程度	Xランク	
3	^{おりつめ} 折爪断層	最大 M7.6 程度	Xランク	
4	花輪東断層帯	M7.0 程度	Aランク	
5	能代断層帯	M7.1 程度以上	Zランク	1694年に能代地震を起こした。
6	北上低地西縁断層帯	M7.8 程度	Zランク	
7	雫石盆地西縁 - 真昼山地東縁断層帯 (雫石盆地西縁断層帯)	M6.9 程度	Xランク	同時に活動した場合、地震の規模はM7.5程度。北部は1896年に陸羽地震を起こした。
	雫石盆地西縁 - 真昼山地東縁断層帯 (真昼山地東縁断層帯 / 北部)	M6.7 - 7.0 程度	Zランク	
	雫石盆地西縁 - 真昼山地東縁断層帯 (真昼山地東縁断層帯 / 南部)	M6.9 - 7.1 程度	Xランク	
8	横手盆地東縁断層帯 (北部)	M7.2 程度	Zランク	同時に活動した場合、地震の規模はM7.7程度。北部は1896年に陸羽地震を起こした。
	横手盆地東縁断層帯 (南部)	M7.3 程度	Xランク	
9	北由利断層	M7.3 程度	A*ランク	
10	新庄盆地断層帯 (西部)	M6.9 程度	Aランク	
	新庄盆地断層帯 (東部)	M7.1 程度	S*ランク	
11	山形盆地断層帯 (北部)	M7.3 程度	S*ランク	同時に活動した場合、地震の規模はM7.8程度。
	山形盆地断層帯 (南部)	M7.3 程度	Aランク	
12	庄内平野東縁断層帯 (北部)	M7.1 程度	Zランク	同時に活動した場合、地震の規模はM7.5程度。北部は1894年に庄内地震を起こした可能性がある。
	庄内平野東縁断層帯 (南部)	M6.9 程度	S*ランク	
13	長町 - 利府線断層帯	M7.0 - 7.5 程度	Aランク	
14	福島盆地西縁断層帯	M7.8 程度	Zランク	
15	長井盆地西縁断層帯	M7.7 程度	Zランク	
16	双葉断層	M6.8 - 7.5 程度	Zランク	東北地方太平洋沖地震の影響で地震発生確率が高まっている可能性がある。
17	会津盆地西縁・東縁断層帯 (会津盆地東縁断層帯)	M7.7 程度	Zランク	1611年に会津地震を起こした可能性がある。
	会津盆地西縁・東縁断層帯 (会津盆地西縁断層帯)	M7.4 程度	Zランク	
18	^{せきや} 関谷断層	M7.5 程度	Zランク	

地震発生可能性を表すランクについて

- Sランク (高い) : 30年以内の地震発生確率が3%以上
- Aランク (やや高い) : 30年以内の地震発生確率が0.1~3%
- Zランク : 30年以内の地震発生確率が0.1%未満
- Xランク : 地震発生確率が不明

(過去の地震のデータが少ないため、確率の評価が困難)

地震後経過率が0.7以上である活断層は、ランクに*を付記する。

*Sランク、Aランク、Zランク、Xランクのいずれも、すぐに地震が起こることが否定できない。

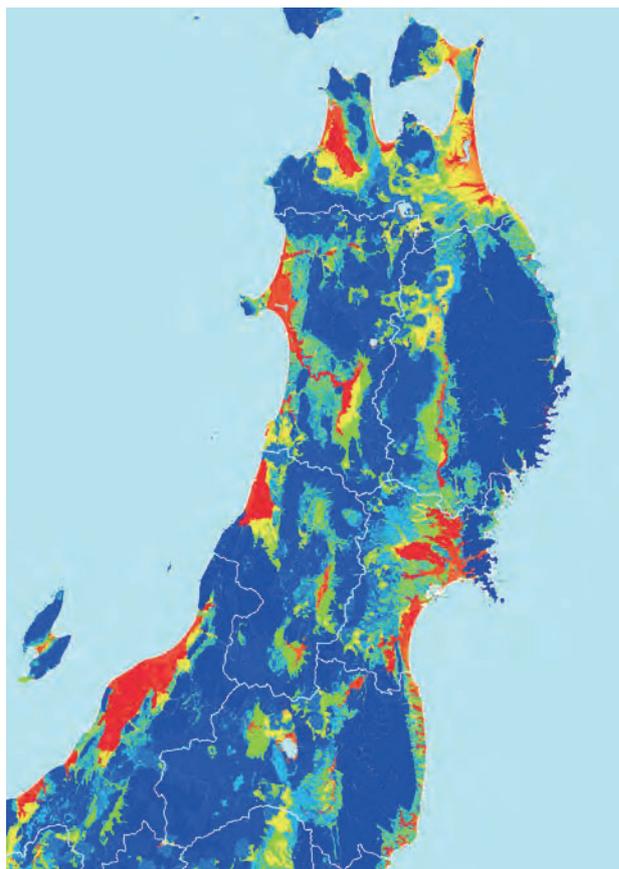
※ 地震後経過率とは、現時点の地震発生切迫度を示す数字です。1に近づく、次の地震がいつ起きてもおかしくない状態と言えます。



地震による揺れの強さは、地震の規模、断層からの距離に加えて、地盤の軟らかさやその厚さなどによって大きく変わります。

東北地方では、東部の北上・阿武隈山地と中央に位置する奥羽山脈、西部の出羽・飯豊（いいで）山地など南北に延びる山地の間に低地や盆地が形成され、また沿岸に近い河口周辺には大規模な平野が広がっています。そのような場所では河川の作用により土や砂が厚く堆積しており、地震の揺れが増幅されやすい傾向にあります。このような傾向は、例えば人工的に湖沼を埋め立てた秋田県八郎潟などにも当てはまります。

人口や産業が地震時に揺れやすい平野や盆地に集中しているため、注意が必要です。



【引用】 国立研究開発法人防災科学技術研究所 地震ハザードステーション J-SHIS
 ←小 大 (揺れが大きくなりやすい) →
 地盤の揺れやすさ (地盤増幅率)

自分の住む場所の地震による揺れやすさを調べてみよう ～地震ハザードステーション J-SHIS～

自分の住む地域について、「J-SHIS」を使って地下での活断層の広がりや周辺地盤、揺れの大きさなどについて調べてみましょう。

J-SHIS Map (ウェブ版) : <http://www.j-shis.bosai.go.jp/usage>

J-SHIS 公式アプリ : <http://www.j-shis.bosai.go.jp/app-jshis>



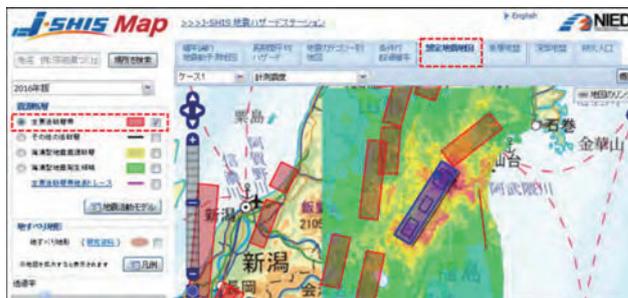
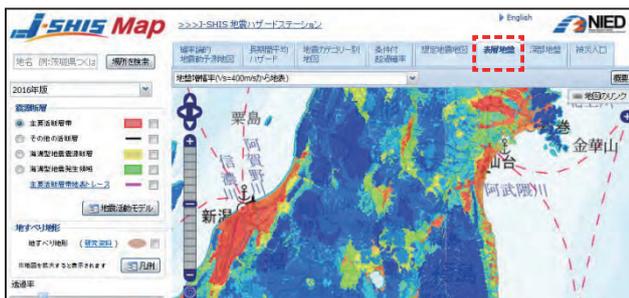
J-SHIS Map



J-SHIS アプリ

J-SHIS Map の使い方

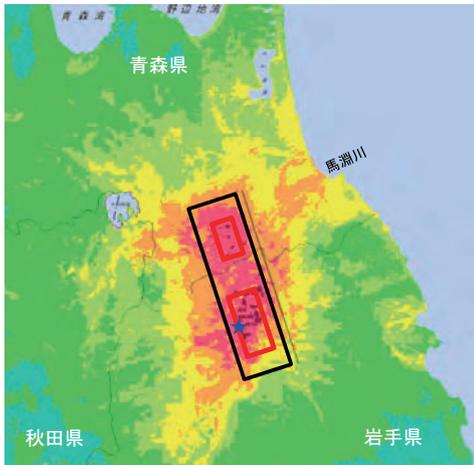
- ① J-SHIS Map にアクセスし、 ボタンを押します。
- ② 右上の「表層地盤」をクリック (タップ) すると、各地の地盤が表示されます。(地図は拡大も可能です。)
- ③ 右上の「想定地震地図」をクリック (タップ) します。
 次に、左上の「主要活断層」の右の□に✓を入れると、全国の活断層が表示されます。
 調べたい活断層を地図上でクリック (タップ) すると、その活断層で地震が発生した場合に予想される揺れ (震度) が表示されます。



【引用】 国立研究開発法人防災科学技術研究所 地震ハザードステーション J-SHIS

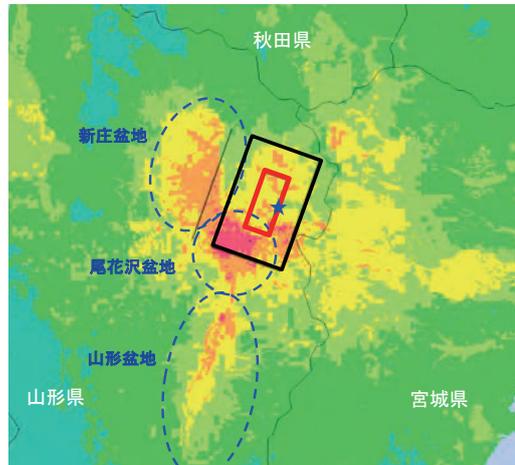
活断層の地震で予想される強い揺れの広がり

○折爪断層の例

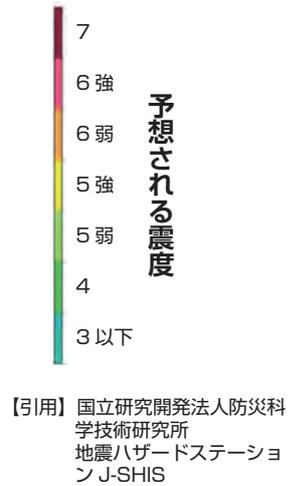


活断層周辺のほか、馬淵川周辺でも震度6弱以上の激しい揺れが予想されます。

○新庄盆地断層帯（東部）の例

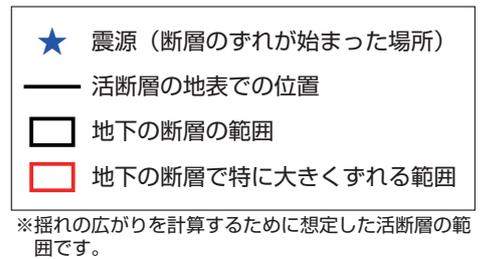


最上川沿いに発達した新庄盆地や山形盆地などで震度6弱以上の激しい揺れが予想されます。



※同じ活断層で発生する地震でも、さまざまな揺れの広がりや強さが予想されます。例えば、震源が異なれば、上図で示した震度よりも大きくなる場合もあります。

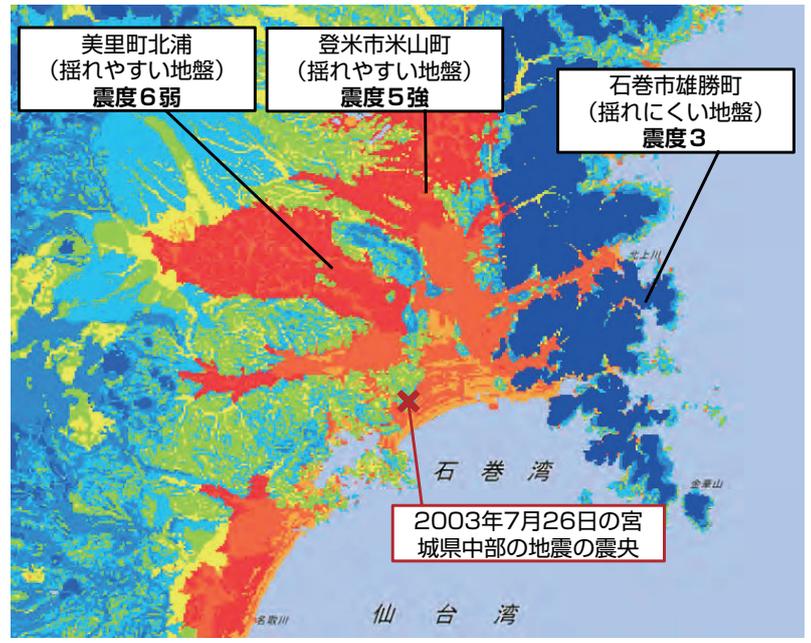
J-SHIS（左下参照）を使って、自分の住む地域の活断層で地震が発生した場合に予想される揺れを調べてみましょう。



地盤による揺れの違い（2003年7月26日の宮城県中部の地震の場合）



(航空写真提供：国土地理院)



[引用] 国立研究開発法人防災科学技術研究所 地震ハザードステーション J-SHIS



宮城県中北部の地盤の揺れやすさと2003年7月26日の地震における各地の震度

2003年7月26日に発生した宮城県中部の地震（マグニチュード6.4）では、震源からの距離が同程度でも、地盤の揺れやすい場所（川沿いの平野部や低地など）ほど強く揺れ、地盤の揺れにくい場所（山間部など）では相対的に揺れは小さかったことが分かります。

過去に被害をもたらした主な地震

過去に東北地方に被害をもたらした主な地震としては、下表のようなものがあります。

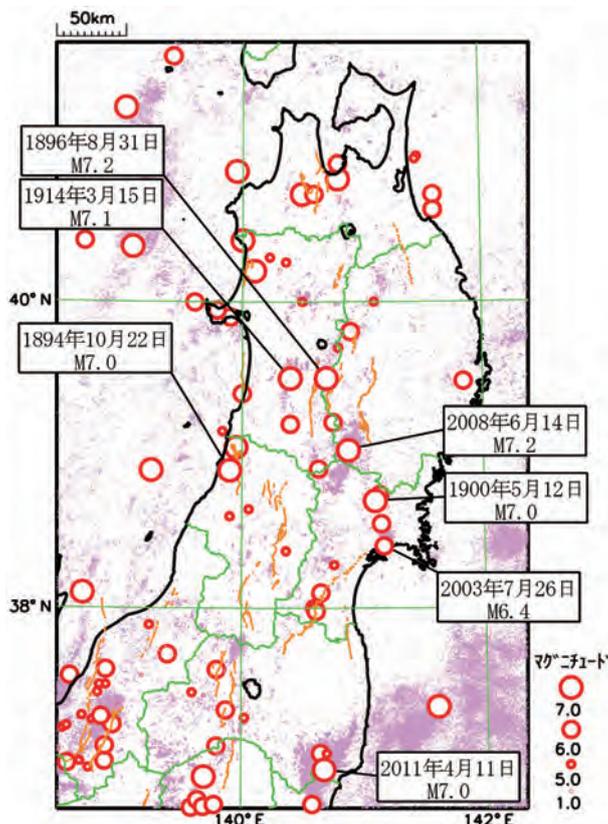
このうち、例えば、1894年の庄内地震は庄内平野東縁断層帯の一部が活動した可能性があります。また、1896年陸羽地震は、秋田県の横手盆地東縁断層帯の北部とその東に位置する岩手県の真昼山地東縁断層帯の北部が活動しました。このように、東北地方では活断層周辺を中心に被害を伴う地震に見舞われてきました。

一方、活断層の存在が知られていない場所でも、M6程度の規模の地震により局所的に被害が生じることがあり、1914年の秋田仙北地震や2011年の福島県浜通りの地震などのようにM7程度の地震が発生した事例もあります。

東北地方で過去に被害をもたらした主な地震

発生日月	地震名（または発生場所）	被害	地震の規模
1894年10月22日	庄内地震（山形県）	山形県酒田を中心に死者726人など	M7.0
1896年8月31日	陸羽地震（秋田県・岩手県）	秋田県仙北を中心に、秋田県、岩手県で死者209人。大規模な山崩れも発生	M7.2
1900年5月12日	（宮城県北部）	宮城県遠田を中心に死傷者17人	M7.0
1914年3月15日	秋田仙北地震 <small>こかくび</small> [強首地震]	横手盆地や雄物川沿いなど、秋田県仙北を中心に死者94人	M7.1
2003年7月26日	（宮城県北部）	大きな前震・余震が発生。倒壊家屋は1,000棟以上	M6.4
2008年6月14日	岩手・宮城内陸地震	死者・行方不明者23人など。11ページ参照	M7.2
2011年4月11日	（福島県浜通り）	いわき市で死者4人。平成23年東北地方太平洋沖地震の1か月後に発生	M7.0

ある活断層で、過去千年程度の間、地震が発生した記録が残っていないからといって、その活断層で地震が発生しないわけではありません。



東北地方で過去に被害をもたらした主な地震

○が過去の被害地震、オレンジ色の線が主な活断層の位置を表しています。海のプレートの沈み込みに伴う地震や深いところで発生した地震は除いています。

薄いピンク色の点は、近年の地震観測で得られた浅い小規模の地震の分布です。

平成 20 年（2008 年）岩手・宮城内陸地震（2008 年 6 月 14 日、M7.2）

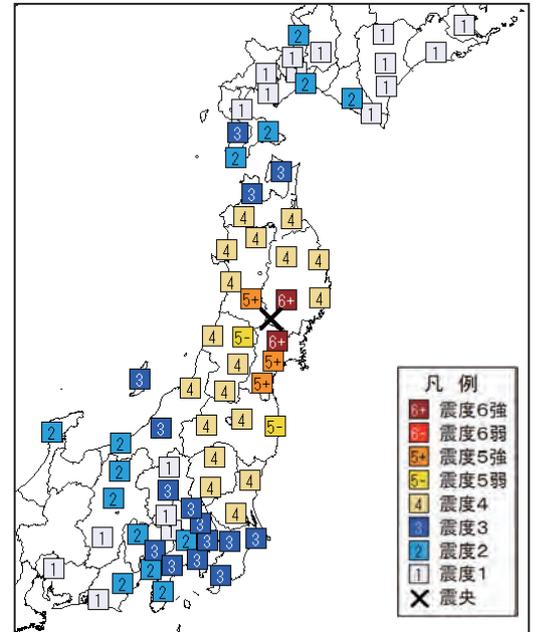
平成 20 年（2008 年）岩手・宮城内陸地震は、岩手県内陸南部を震源として発生した地震です。この地震により、岩手県奥州市、宮城県栗原市で最大震度 6 強、宮城県大崎市で震度 6 弱が観測されたほか、東北地方を中心に、北海道から関東・中部地方にかけて震度 5 強から震度 1 が観測されました。

最大の余震は本震発生から約 40 分後に発生した M5.7 の地震で、宮城県大崎市で最大震度 5 弱が観測されました。



震央と周辺の活断層の位置

右下の写真は、一関市巖美町柵木立での地表の変化の様子
水田の左側が隆起し、干上がっていることが分かる
(写真提供：産業技術総合研究所 吉見雅行氏)



平成 20 年（2008 年）岩手・宮城内陸地震の震度分布図

北上低地西縁断層帯の南部にあたる活断層（出店断層）の南西に位置する地域では、地震後に地表に変化が表れており、その後のトレンチ調査などで過去にも繰り返し活動した痕跡が見つかったことから、この地震はそれまで知られていなかった活断層によるものである可能性があります。

この地震により、宮城県を中心に岩手県、秋田県、山形県、福島県で死者・行方不明者 23 人、重傷者 426 人、全壊 30 棟、半壊・一部損壊 2,687 棟などの被害がありました。

また、山間部で大規模な土砂災害が多数発生しました。岩手県一関市の国道では、地すべりにより橋脚が崩落して落橋したほか、宮城県栗原市でも大規模な地すべりが多数発生しました。



橋脚の崩落
(岩手県一関市の祭時（まつるべ）大橋)



大規模な地すべり
(宮城県栗原市の荒砥沢（あらとざわ）ダム周辺)
(航空写真提供：国土地理院)

強い揺れ

- ・地震を起こした断層の周辺や軟弱な地盤の上では、激しい揺れに見舞われます。
- ・規模が小さい地震でも、局所的に強い揺れになることがあります。
- ・強い揺れにより、建物やブロック塀が倒壊するなどの被害が発生します。
- ・建物の中では、物が落ちたり、倒れたり、動いたりします。落ちたり倒れた物にぶつかって怪我をしたり、避難するスペースをふさいでしまうこともあります。
- ・断層がずれ動くことによって、地表に段差や亀裂が生じ、建物などに被害が発生することがあります。
- ・山間部や傾斜地などでは、土砂災害が発生することがあります。



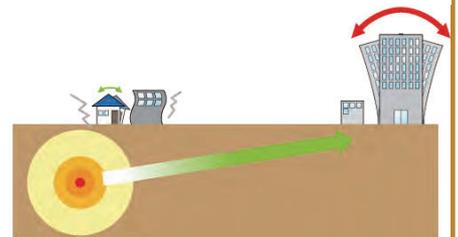
強い揺れにより倒壊したブロック塀
(2016年 熊本地震)

長周期の揺れ

地震の揺れ方には、ガタガタと小刻みに揺れる（短周期の）揺れ方と1往復するのに長い時間をかけて揺れる（長周期の）揺れ方があります。

長周期の揺れは、短周期の揺れに比べて遠い所まで伝わりやすく、高層ビルや長い橋などを大きく揺らす性質があります。

2004年の新潟県中越地震では、遠く離れた東京都内のビルでもエレベータが止まるなどの被害が発生しました。



長周期の揺れは、遠くまで伝わりやすく、高層ビルなどを大きく揺らす

津波

断層が海域にまでおよぶ場合などは、津波を発生させることがあります。海岸や川の河口付近で強い揺れを感じたときや津波警報などを見聞きしたときは、直ちに安全な高台などに避難しましょう。



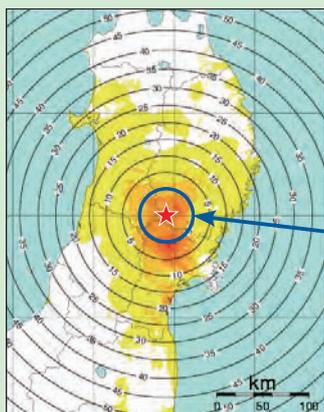
地震で発生した火災
(1995年 兵庫県南部地震)
写真提供：神戸市（人・街・ながた震災資料室）

強い揺れによる火災、土砂災害

地震による強い揺れで建物が倒壊して出火したり、電気製品から出火するなど、同時多発的に火災が発生して延焼することがあります。

地震により地盤の緩んでいる場所では、その後の地震や雨、雪などによって土砂災害が発生することがあります。

緊急地震速報が間に合わない！？



緊急地震速報は、強い揺れが来ることを事前にお知らせして、自らの身の安全を守ることなどに役立てていただくための情報です。地震計で観測されたデータから直ちに地震の規模や震源等を計算して、強い揺れになると予想される地域を対象に発表します。

緊急地震速報発表前に揺れた地域（青円の内側）

しかし、陸域の浅い地震などで震源に近い地域では、緊急地震速報より先に強い揺れが到達することがあるなど、技術的な限界があります。

震源：★
震度： 4 5弱 5強 6弱 6強 7

図中の数字は、緊急地震速報の発表後から強い揺れが到達するまでの理論的な猶予時間（秒）を表しています。

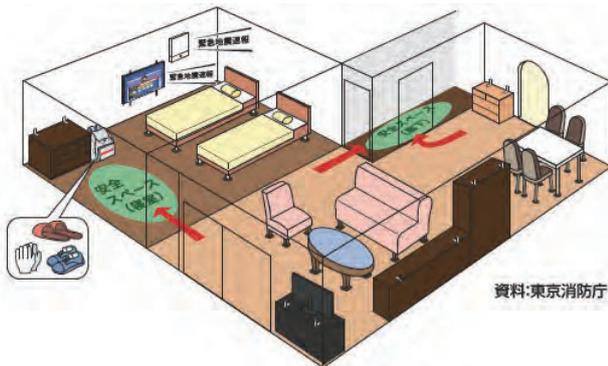
事前の備え

陸域の浅い地震では、緊急地震速報が間に合わないことがあります。このため、突然の揺れに十分に身構えることが難しい場合を想定した事前の備えがとても大切です。

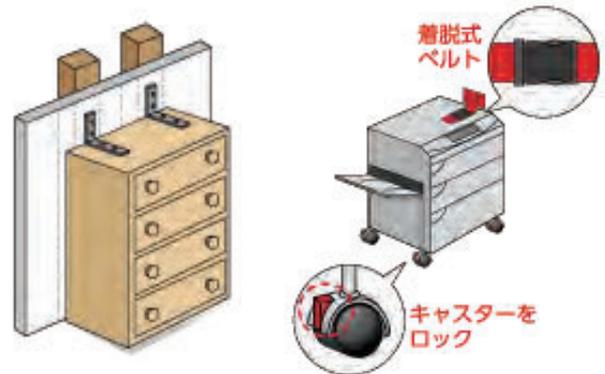
自分の住んでいる地域の過去の地震やその被害を知って、陸域の浅い地震でどのようなことが起こるのかを想像しながら、事前の備えを行いましょ。自宅や学校・職場など、普段の自分の行動範囲を考えながら、どのような危険が起こりうるか考えて備えることが大切です。

陸域の浅い地震だけでなく地震全般への備えとしては、具体的には建物の耐震補強、家具の固定、水や食料等の備蓄、避難場所の確認などがあります。家族と相談しながら備えを進めましょ。

安全スペースを確保しましょ



家具や家電を金具等で固定しましょ



住居内で、なるべくものを置かない安全スペースを作っておきましょ。緊急地震速報を受けた場合や強い揺れが襲ってきたときには、安全スペースへ退避し姿勢を低くして身の安全を図りましょ。

散乱したガラス等でケガをすることがあるので、厚底のスリッパや軍手などを用意しておきましょ。

地震が発生したら

緊急地震速報を見聞きしたり強い揺れを感じたら、大きな家具や窓ガラス、ブロック塀や崖などから離れ、身の安全を図りましょ。強い揺れが続いている間は、自分の身を守ることを最優先にしてください。

慌てて戸外に飛び出したり、無理に火を消しに行くことは危険です。

揺れが収まったら、火災の発生を防ぐため、火を消したり、電気のブレーカーを止め、周りの状況を良く確認して、より安全な場所に避難しましょ。

地震が繰り返し発生しているあいだは

ひとたび大きな地震が発生すると、しばらく（数日間～数週間が目安）は、同程度かさらに強い揺れの地震が繰り返し起こるおそれがありますので、次のようなことに十分注意しましょ。

屋内で気をつけること

強い揺れによって、建物が崩れやすくなっていることがありますので、建物の安全性が確認できるまでは近づかないようにしてください。建物の安全性が確認できた後も強い揺れに備えて、落ちてきたり、倒れてきたりしそうな家具などがいない安全な場所で過ごしましょ。

屋外で気をつけること

屋外では、傾いた家屋やブロック塀が倒れてくる可能性があります。崖や裏山等は、その後の地震で崩れる危険性もあるので、不用意に近づかないようにしましょ。強い揺れで地盤が緩んでいることもあるので、その後の雨や雪にも注意してください。

デマ（流言飛語）に気をつけること

大きな地震が発生すると、デマなどが流れることがあります。根拠のないデマなどに惑わされることなく、气象台や地元自治体などの信頼できる情報をもとに適切に行動することが大切です。また、信頼できる情報かどうか分からない場合には、むやみに広めないようにすることも災害時の混乱を防ぐ大切な行動です。

Q1

・陸域の浅い地震が起きたら気をつけることは何ですか？

A1

・揺れの大きかった場所では、その後も大きな揺れの地震に警戒が必要です。

地震によって傾いたり倒壊した建物や塀、崖など、危険なところには近づかないでください。また、強い揺れで建物の耐震強度が以前より弱くなっている可能性があります。安全性が確認できるまでは、安全な場所で避難を続けてください。

Q2

・陸域の浅い地震では、余震はどれくらい続くのですか？

A2

・一般的には、規模の大きい地震ほど余震は長く続きます。

また、陸域の浅い地震では、直上は強い揺れとなることが多々あります。地震の活動は、盛衰を繰り返すことが多いので、地震回数が一時的に減っても落ち着いた状態だと判断しないでください。規模の大きな余震が発生すると、再び地震回数が増える場合が多く、平成20年（2008年）岩手・宮城内陸地震でも余震の発生がやや落ち着いてきた後に、再び地震回数が増加しました。

Q3

・自分の感じた揺れの大きさと気象庁の発表震度が違ったのはなぜですか？

A3

・地震の揺れは地盤や地形の影響を受けやすく、隣接した場所でも震度が1階級程度違うことはよくあります。

また、陸域の浅い地震では、直上の人は揺れを感じても、わずかに離れた場所で震度が観測されない場合もあります。

Q4

・地震雲はあるのですか？

A4

・雲は大気現象であり、地震は大地の現象で、両者は全く別の現象です。

雲のたなびく向きは、上空の気流によって支配されています。気流が地形の影響を受けることはありますが、地震の影響を受ける科学的なメカニズムは説明できていません。「地震雲」が無いと言いきるのは難しいですが、仮に「地震雲」があるとしても、「地震雲」とはどのような雲で、地震とどのような関係であらわれるのかが科学的な説明がなされていない状態です。

Q5

・「直下（型）地震」とはどのような地震ですか？

A5

・一般的に、都市部などの直下で発生する地震で、大きな被害をもたらすものを指すことが多いようです。

陸域の浅い地震の規模は、海溝付近で発生する巨大地震に比べて小さいことが多いのですが、地震が発生する場所が浅く真上の人に住む地域に近い場合があるため、マグニチュード6～7程度でも大きな被害をもたらすことがあります。

Q6

・地震の際に山間部など揺れにくい地盤の場所は安全ですか？

A6

・安全とは限りません。

奥羽山脈や出羽・飯豊（いいで）山地などでは、直下の浅い地震などにより地すべりが発生する恐れがあるので注意が必要です。

2008年の岩手・宮城内陸地震はそのような場所で発生し、実際に多数の地すべりが発生しました。

Q7

・東北地方太平洋沖地震の影響で、活断層で地震が発生しやすくなりましたか？

A7

・陸域の浅い地震は増えていますが、活断層への影響は正確には分かっていません。

なお、活断層にかかる力が変化したことにより、双葉断層など一部の活断層では、地震の発生する確率が高くなっている可能性があると考えられています。

Q8

・陸域の浅い地震についてもっと知りたいのですが？

A8

・地震に関する最新の知見を知りたい場合は、地震本部ホームページやJ-SHIS（8ページ参照）をご覧ください。

また、想定される地震やその被害については、地域防災計画を定めている地元自治体にお問い合わせください。

平成28年(2016年)熊本地震

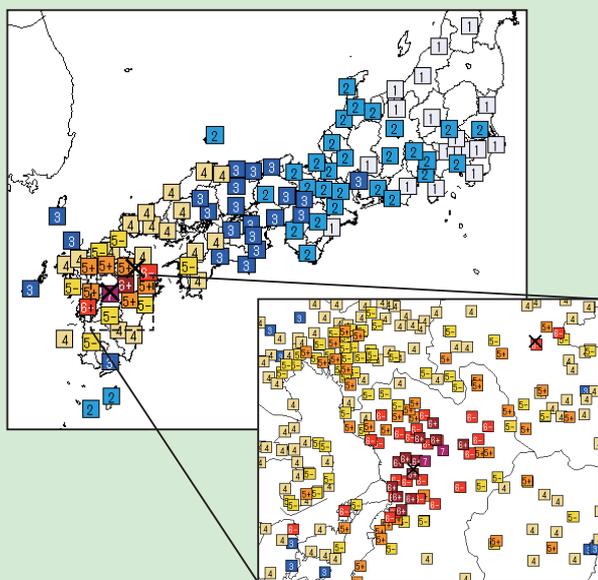
平成28年4月14日21時26分、熊本県熊本地方の深さ11kmでマグニチュード(M)6.5の地震が発生し、熊本県益城町で最大震度7を観測しました。また、4月16日01時25分には、同地方の深さ12kmで、さらに規模の大きいM7.3の地震が発生し、熊本県益城町と西原村で最大震度7を観測しました。

14日の地震は日奈久断層帯、16日の地震は主に布田川断層帯のそれぞれ一部の区間が活動したものと考えられています。16日の地震発生後、強い揺れを伴う地震は熊本地方にとどまらず、熊本県阿蘇地方や大分県中部でも発生するようになりました。一連の地震により、死者271人、全壊家屋8,668棟などの甚大な被害が生じました(平成30年9月14日現在)。

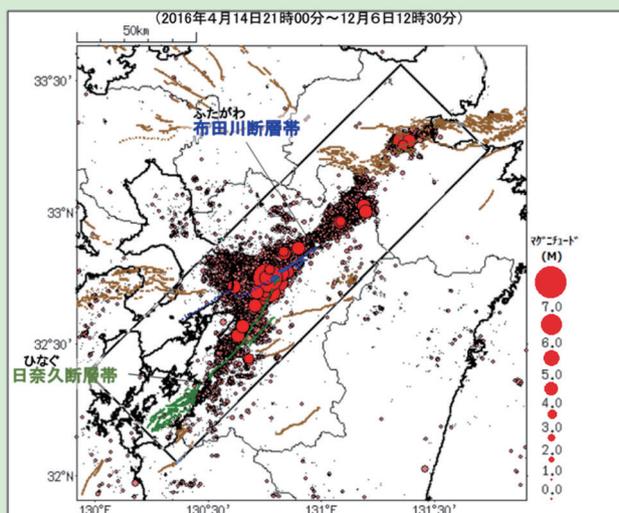
熊本地震では、活断層で発生する地震の恐ろしさをあらためて認識させられました。

【表紙の写真】

左：熊本城の被害の様子、中央：宇土市役所の被害の様子、右：地表地震断層(写真提供：産業技術総合研究所地質調査総合センター)



4月16日01時25分の地震の震度分布



熊本地震の地震活動と活断層の関係

赤丸は地震の位置、色付きの線は活断層の位置を表しています。

布田川断層帯や日奈久断層帯に沿って、広い範囲にわたって多くの地震が発生していることがわかります。

宇宙から見た活断層

東北地方の地下には、長期的には東西方向に力が加わっています。これにより、東北地方の活断層は南北方向に延びる形に多く分布しており、例えば仙台平野や山形盆地では山地と低地の境目に見られます。

東北地方太平洋沖地震後は力の加わり方が変化しましたが、これが活断層にどのような影響を与えるかは、今後の調査研究を待つ必要があります(図中の線は活断層を表しており、活断層の色分けは、7ページの地震発生可能性を表すランクを参照してください)。



Included ©JAXA

文部科学省 研究開発局地震・防災研究課 (地震調査研究推進本部事務局)

(〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2) HP:<https://www.jishin.go.jp/>

気象庁 地震火山部管理課

(〒100-8122 東京都千代田区大手町1-3-4) HP:<https://www.jma.go.jp/>

地震に揺らがない国にする
地震本部
政府 地震調査研究推進本部
The Headquarters for Earthquake Research Promotion